



ノーブルレス オブリーージュ

Noblesse oblige

貴き者の責務

日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第九回

ひさあきら

作家 高崎哲郎

De Profundis(深淵より)②、ロンドン支店長、日英関係緊迫、愛妻急逝

戦前の世界三大貿易金融専門銀行のひとつ横浜正金銀行のエリート行員加納久朗は、インド・カルカッタ支店長、本社(本店)は昭和初期に国際港湾都市・横浜から帝都・東京の中心部(日本銀行の並び)に移転を経て、昭和9年(1934)7月1日、栄えあるロンドン支店長に就任した。48歳、「働き盛り」であった。国際派の久朗には打つてつけのポストだった。同支店はロンドンの金融街(シティ)の中心部ビショップスゲート(Bishopsgate)7番地にあった。野原大輔の後任であった。久朗夫妻の4人の子どものうち3人は成人しており、二度目の今回は妻多津、13歳の末娘英子(愛称ローザ)、中年女性の使用人まさ、さらに愛犬を同伴して横浜から出航した。3週間の長い船旅の末、イギリス最大の貿易港リバプールに着いた。翌日列車に乗り換えてロンドンに着した。



横浜正金銀行ロンドン支店跡 (筆者撮影、当時のまま残っている)

を媒介として政党政治を支えるということでもあった。「歴史認識のない政治や外交は根のない花である」。久朗の口癖だった。

最後の内大臣木戸幸一は、昭和維新の元勳木戸孝允の孫である。天皇側近ナンバーワンの「昭和の重臣」であった。学習院から京都帝大時代を原田熊男や近衛文麿と共に歩み、昭和の動乱の幕開けとなった昭和5年に商工省の官僚から内大臣秘書官長に転じて昭和天皇の側近に加わり、元老西園寺公望に親炙する「西(園寺)公三羽鳥」のひとりとして、第一次近衛内閣で文部大臣と厚生大臣を、続く平沼内閣で内務大臣を歴任した。昭和15年内大臣に就任すると、太平洋戦争開戦から終戦に至る最も困難な時代に常侍輔弼の大任を担い、戦後はA級戦争犯罪容疑者として巣鴨プリズンに収監されて終身刑の判決を受けた。

久朗がロンドンに赴任する以前に勃発した満州事変は、日中関係はもとより英米など国際関係に取り返しつかない深刻な衝撃を与えた。同事変は、昭和6年(1931)9月18日の柳条湖事件から8年5月の塘沽協定までの日本軍部による中国東北部(奉天・吉林・黒竜江)・内蒙古東部への一連の武力進攻を指す。事変の結果、7年3月1日、関東軍の影響下に満州国が建国された。関東軍は対ソ戦の基地確保と中国による権益回収への予防措置として、関東軍参謀石原莞爾らの主導で武力による満蒙領有計画を実行に移した。

柳条湖事件勃発後、中国は国際連盟に提訴し、以後、日本の軍事行動を抑制しようとする国際連盟と、それに挑戦する関東軍が鋭く対立して行く。若槻内閣は事変の不拡大方針をとった。だが関東軍の軍事行動の積み重ねに、国際連盟やオプザーバー国アメリカは日

彼はイギリス人のライフスタイルをこよなく愛し、重責の支店長として「日英友好の懸け橋たらん」との夢を抱いた。だが前回のような優雅で充実した海外勤務や生活をエンジョイすることを時代が許さなかった。日英関係は緊迫し後戻りの出来ない深淵に陥るのである。ここで彼がロンドン支店長に就任するまでの日本の内外の情勢をおさえておきたい。

昭和5年3月28日、久朗の信仰上の師(心の師)である内村鑑三が永眠した。享年69歳。久朗は内村の葬儀に参列し、師の遺影を前にクリスマスチャンとして師の「非戦の思想」を実践して行くことをあらためて誓った。

昭和初期の日本の歴史は、陸軍の横暴により民衆の生命を犠牲にして成り立っていた。

戦前、天皇が内閣総理大臣を任命する際言い渡したのは、慎重な外交と憲法の遵守であった。前者は英米との関係を重視せよとの意味であり、自由経済の尊重ということでもあった。後者は、内閣、議会、軍部、その他の諸機関が協力し合って意思決定せよとの要請であった。軍部の暴走は許さないと決意を示したものであった。だが主権者である天皇が明確に指示しているにもかかわらず、現実には2つの方針は無視され押し流されていった。

張作霖の爆殺(昭和3年6月)から田中内閣の瓦解(昭和4年7月)へ、浜口内閣下の金解禁(5年1月)と同首相狙撃(同11月)、

本政府の軍部統制能力に不信をもった。特に連盟は、満鉄付属地に対する自衛権行使とは弁明できないとして、張学良軍の根拠地錦州への爆撃と北満進攻を重視した。昭和7年1月7日、アメリカの國務長官スラムソンが非合法手段による満州の現状変更は認めないとの不承認声明を発表した。

調査団派遣を要求する日本の提案を受けて、リットン調査団が事件現場と中国・日本を訪問し、同年9月30日に報告書を連盟に提出したが、報告書発表前の9月15日に日本は満州国を承認した。満鉄付属地への早期撤退と中国の満州に対する主権承認を内容とするリットン報告書は、昭和8年2月24日の国際連盟総会で採択され、日本は3月27日に連盟脱退を通告した。さらに熱河作戦をすすめて軍事支配領域を拡大し、同年塘沽協定によって満州の中国本部からの分離が確定した。この間、昭和7年1月上海事変が始まると、英米両国政府は日本政府に外国人の生命財産を危うくした日本軍の行動を強く抗議し、アメリカは巡洋艦と駆逐艦をフィリピンから上海へ派遣した。英米は上海事変を国際協調主義の原則に対する公然たる挑戦と受け止めたのであり、その影響は満州事変の比ではなかった。日本がアメリカとの強い信頼関係を自ら断ち切ったことになった。

帝政ドイツのモルトケ元帥は言う。「規律こそ軍隊の魂なり。規律なき軍隊は常に浪費的存在にして、戦時においては役に立たず、平時においては危険きわまるものなり」。そんな恐るべき姿に日本の軍隊も近づきつつあった。

満州事変が起きた昭和6年の9月18日、イギリス政府は金本位制の停止を決定し、週明けの21日午前零時を期して実施した。5月に

後継若槻内閣の成立(6年4月)と満州事変(同年9月)、犬養内閣による金輸出再禁止(同年12月)を経て7年春には反動右翼による財界指導者井上準之助、同団琢磨の暗殺などテロやテロ未遂が横行した。遂に軍事クーデター5・15事件により議会政治は息の根を止められた。この後は、国家のために犠牲を強要するデスポティズム(専制政治)の跳梁跋扈に転落する。これがドイツに登場したナチズムの狂騒に共鳴することになる。昭和6年10月1日、内大臣秘書官木戸幸一は西園寺公望秘書原田熊男邸に向いて、近衛文麿や外務省情報部長白鳥敏夫(いずれも久朗の知友)と「軍部の陰謀」について話し合った。「陸軍中堅分子の結束頗る強く、昭和2年頃よりの計画にして、政党を打破し一種のディクテーターシップにより国政を処理せむとの計画なるが如く、実に容易ならざる問題なり。而して如此問題は現在の政治家連は到底リアライズ出来そうになく、結局、之に対する方策は頗る困難なり。真に困難なり!」(『木戸日記』)。この軍部の「陰謀」情報を、久朗は木戸の関係筋から密かに入手し、暗澹たる気持ちに陥った。非戦主義者である久朗にとつて、選択肢は英米との協調しかなく、それは中国においては門戸開放の原則を意味していた。同時に日本においては自由貿易、自由経済を意味していた。思想的には軍国主義に反対し自由主義という原理

はドイツとオーストリアで金融恐慌が起きて以来、約2億ポンドの正貨が流出してイングランド銀行の正貨準備高が1億3000万ポンドを割ったので、マクドナルドを首班とする労働、保守、自由3党連立の挙国一致内閣は、金本位離脱を声明し、「デンマーク、ノルウェーなどが追隨した。正貨金融の王座に君臨することの久しかったポンド帝国崩壊ののろしが上がり、ポンド価値は3分の2に下落し、世界はデフレーションから一転して「新たなインフレーションへの出発」の時期を迎える。

極度のデフレ、多額の正貨流出、日本も全く同じ事情にあったが、蔵相井上準之助は英国はしばらくの期間を置いて元通りの金本位に復帰すると見ており、「国家財政の基礎、その他の点において我国ほど堅実な国は米仏以外に見当たらない」と強気の声明を出して金輸出再禁止を否定した。首相若槻は「もはや再禁止やむなしではないか」と井上に勧めたが、応じなかった。もし日本政府はイギリスに倣って直ちに金輸出を再禁止していれば、それから3か月足らずの間に起きたドル買い騒ぎで、横浜正金銀行になけなしの5億1000万円分のドルを売らせて3億5000万円の正金準備を失うことはなかった。解禁時に13億円台だった正金準備は2年足らずの間に5億円台に急減し、再禁止によって円相場は100円⇨49ドルから1年後には20ドルを割って6割も下落する。久朗は本社にあつてこの惨状に対処するグループに加えられたが、激動する国際関係になす術がなかった。

久朗がロンドン勤務に戻ってきた時、彼の生活環境は前回の時代と大きく変わった。日本政府に支援された横浜正金銀行のロンドン

支店長は、ロンドン在住の日本人社会の事実上のリーダーにもなったことを意味する。重要な変化はイギリス国内における日本の甚だしいイメーჯダウンだった。満州事変など一連の軍事行動や国際連盟からの脱退は、イギリス国民の日本に対する名声やイメーჯを致命的に傷つけてしまった。日本の軍事力を背景にした中国や東南アジア諸国の市場への進出や資源確保はイギリス海外市場にとって脅威となった。

久朗のロンドン勤務は、台頭する反日感情の払拭おとぎに個人としてまた公人としてすべてを捧げたとも言える。彼の公的な活動は祖国とイギリスとの架け橋として、祖国の国際的立場の修復に必死に動くことであてられた。世界最大の為替銀行の一つのイギリス支店代表として、彼は国際的な金融界の首脳らはもとより政界の有力者にも果敢に接近し理解を求めた。

加納家はほぼ3日に1回著名人を呼んで晩餐会を開いた。このため彼は支店長公邸をロンドン南方郊外のストレッタムから中心街のケンジントンに移した。公邸は高級住宅街のプリンセス・ゲート・コート (Princess Gate Court) にあった。ロンドン支店までバスで20分程度の距離だった。久朗の生活ぶりは見た目には輝かしいものだった。すべての食料・雑貨品はハロッズ(ロンドンの代表的な高級百貨店)に注文し届けさせている。未婚の英子(ローザ)を英国社交界にデビューさせようと準備した。彼の考えでは、子爵に期待されているライフスタイルや規準を維持することはイギリスにおいて当然の義務に込めることであった。彼は父久宜が鹿児島県知事時代



加納家私邸跡 (筆者撮影、当時のままのマンション、ロンドン住宅街、PRINCESS GATE COURT, LONDON)

横浜正金銀行ロンドン支店長のもう一つの重責は、スイス・バーゼルにある国際決済銀行 (B.I.S. Bank for International Settlements) の商業・工業・金融分野の日本代表 (理事) として働くことだった。これは国際人加納久朗の人脈を大きく広げるのに役立った。

国際決済銀行は、第一次世界大戦後、ドイツの賠償金支払い問題に当たって、昭和5年(1930)に資本金5億スイス・フランで設立された特殊銀行で、ライン川の港湾都市バーゼルに本部がある。同銀行の主要業務は、第一に国政金融決済に関する実行ないし委託を行うことである。第二に各国中央銀行間の話し合いの場を提供することである。B.I.S.の定例理事会は、8月と9月を除く毎月第二月曜日に開催された。日本やアメリカなど主要先進国の中央銀行総裁その他幹部が非公式に会合しており、重要な協定が成立している。日本は当初、市中銀行がB.I.S.に出資し第二次世界大戦終了に至るまで理事を派遣した。横浜正金銀行ロンドン支店長が理事(日本代表)として派遣されるのが慣例であった。

昭和9年5月から、久朗は毎月一回バーゼルに飛び理事会に出席した。理事会は世界のました。でも両親は本当に仲のよい夫婦でございました。父は母をとっても大切にしておりました。父はわりにせっかちで癩癪いらだ持ちなところがあって、短気をおこすこともございましたけれど、母はいつも「今日はちょっと風当たりが悪いですね」とか言ってニコニコ笑っておりました。母が偉い人だったと思います。

Q: 実際に家をどう切り盛りなさいましたか?
伊藤: お客様が多かったものですから、もうしょっちゅうお偉い方々が…。山本五十六元帥とか講道館の加納治五郎先生とか、当時のゲストブックが残っていましたらびっくりするような方が次から次へと。当時日本からお見えのお客様は、大使館でもお招かれになり、うちでも必ずお招きしておりました。とてもいいイギリス人コック(ホイニイ)がおりましたので、私はその人とメニューを決めました。父の意向で家族だけの食事でも、生活全般においても完璧にイングリッシュ・スタイルを通しておりました。ただ父はとても潔癖な人で、おもてなしは普通官費でいたしますが、全部私費でいたしておりました。

昭和11年6月24日 外交官吉田茂(後の内閣総理大臣)が駐英大使としてロンドンに着任してきた。久朗との宿命的な巡り合いとなる。吉田茂は11年から13年までの約3年間駐英日本大使を務めた。吉田家と加納家は親しい関係にあった。吉田大使が、イギリスとの関係を強化し、ドイツとの関係強化に反対する動きを果敢に行っている間、久朗も銀行員として同じ目的で有力者に面会を求め続けた。マスコミにも対応した。二人は日本とイギリスとは中国問題に関して互いに協調すべきであり、そうできると確信を持っていた。11年10月に吉田茂大使夫妻を歓迎するジャパン・ソサイティの総会で、久朗はアール伯爵の乾

にしたように私財を投じることに躊躇しなかった。リベートを払う際も私費を使った。私利私欲なく精神も行為も祖国のために捧げていた。そこには華族としてのプライドがあった。

金融界の有力者と交流することから、久朗には極めて重要な会議であり、日本の国際関係における立場を説明する重要な機会であった。

◇

昭和10年5月12日、彼が月一度のバーゼルへの公務出張の間に、ロンドンの私邸は悲劇に襲われた。愛妻多津が何の予兆もなく突然倒れ急逝したのである。死因は急性心臓発作だったとされる。享年43歳。敬虔なキリスト教徒としての葬儀が営まれ、遺体はロンドン北方郊外のヘンドン公園墓地 (Hendon Park Cemetery) に埋葬された。彼は墓に手を合わせて「ミルテの花」より「捧げる詩」(作詩フリードリッヒ・リュッケルト(ドイツ)、作曲ロベルト・シューマン(同))をドイツ語で小さい声で歌った。

Du meine Seele, du mein Herz,
君は僕の魂、君は僕の心
Du meine Wonn', o du mein Schmerz,
君は僕の喜び、ああ君は僕の痛み、
Du meine Welt, in der ich lebe,
君は僕の生きる世界
Mein Himmel du, darin ich schwebe,
君は僕の漂たぶ大空
O du mein Grab, in das hinab
ああ、君は僕の墓、そこへ僕は
Ich ewig meiner Kummer gabi
永遠に自分の悲しみを埋めよう！ (以下略)

前日、彼女はいつものように娘ローザと乗馬のレッスンをハイドパークで受け、午後はローワー・シデナムにある横浜正金銀行のテニスコートでプレーを楽しんでいた。他界した日曜日、彼女はローザと一緒にいつものように聖書を読み讃美歌を歌い、午後は静かに編み物をしていて突然倒れたのである。久朗はスイスにいてロンドンに直ちに帰宅することが出来なかった。彼女は美しく知的であり、夫久朗にとって大きな力の源泉であり外交的

杯に応え演説している。

"Capitalists of both countries know all too well that unnecessary and unhealthy competition simply kills their own business. What is needed is collaboration, not competition, coordination, not antagonism." (日英の資本家は、不必要で不健全な競争は自分自身の事業を殺してしまうだけであることを存分に知っている。必要なのは、協調であって競争ではない、調和であって、敵対ではない)

イギリスと日本の経済人の間に交流・対話を増やそうと、久朗は月一度ジャパン・ソサイティの昼食会を創始した。(久朗の英語名刺は子爵(Viscount)とロンドン支店長(Manager)が併記されている)。彼が接触したイギリス側の重要人物には、ボールドウィン首相、イーデン外相、イングランド銀行総裁ラジャパン・ソサイティに参加した影響力のある人々が少なくなかった。同時に、彼は戦争回避に向け秘密裏に日本の有力者に電報や手紙を送り続けた。送り先には牧野伸顕侯爵、近衛文麿公爵、木戸幸一内大臣、原田熊男ら軍部の横暴に批判的な天皇側近の華族グループがいた(次号で詳述)。

スカンジナビア方面への出張でノルウェーに着いた時、彼は新聞を手にして日華事変(昭和12年、1937)が勃発したことを知った。彼は雷に打たれたように動転しすべての日程を切り上げ直ちにロンドンに戻った。「日英関係はPoint of no return'(引き戻せない地点)を越えてしまったのか!」。彼は悔し涙にくれた。

(参考文献・千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料」『吉田茂書翰追補』(財)吉田茂国際基金、『横浜正金銀行全史』、伊藤恵子様(ロンドン在住)提供文献、『日本の近代 政党から軍部へ』(北岡伸一、中央公論新社)、筑波大学付属図書館資料)

(つづく)。



妻多津の墓 (筆者撮影、ロンドン北部のヘンドン公園墓地)

Q: 一家の女主人として大切なことは?

伊藤: 父がいつも申しておりました。女は男が仕事に出る時は、それに頭を全部集中して、そしてどんなことがあっても家庭内の煩わづわしいことは聞かせないでくれ、と。それで帰ってきた時は、どんなに忙しくてもやっぱりきちんと身仕舞を整えて、「お帰りなさい」と言ってお笑顔を迎えるように、と。ですから、結婚する時もそれをすごく注意され

Q: 小さい頃の嫉は厳しかったですか?

伊藤: そうでございますね。お行儀やなんかものすごくやかましくございました。でも私は兄が2人(久通、久次)の、姉が1人(多恵子)の末っ子でしたので、兄たちなんかもっと怖い思いをしたらいいんですけど(笑)。服装でも父の仕事でカルカッタにまいりました時は、あの冷房のないすごい暑さでも父はいつもピシッと背広を着て、家族だけでお食事をいただく時でも、みんなきちんと正装しておりました。

Q: お母様が早く亡くなられたとか?

伊藤: はい。それで父が、こうなったらローザが女主人としてちゃんとしくちゃいけないと言つて、家を任されてしまったんです。兄たちは日本で学校に行っておりましたし、8つ上の姉はもう結婚して日本におりましたので。その時(母死亡時)、私は13歳(正しくは14歳)でしたから、ちゃんとはやれてないんですけど、小さい時から母のやりようを見て教えられておりました。